

## 平和への希望

高橋良一

### 要旨

ティリッヒの平和論において、希望の問題は重要な意味を持つ。ティリッヒは、完全平和の実現を目指す理想主義的立場は現実には挫折せざるを得ないと考える。しかしながら、こうした挫折は平和の実現を断念したシニシズムへと陥るべきではない。ティリッヒは、理想主義の挫折を越えて、それでもなお、われわれを平和の実現へと駆り立てる原動力を希望に見いだす。この希望とは、ユートピア的な幻想とは区別された真正な希望である。それは、人間の存在構造に基礎づけられた希望であり、人間の歴史意識と密接に結びついたものである。人間は未来への志向性を本質的に有しており、希望は未来の先取り、終末の先取りである。神の国の希望とは、歴史の最後における完全な段階を待望することではない。先取りされた成就是断片的な成就である。こうした希望の根拠と正当性を示すことが、平和の問題に対するティリッヒの答えなのである。

### Summary

The problem of hope has great importance in Tillich's thought of peace. Tillich considers it is impossible to realize peace on earth completely. But he never agrees with cynicism which gives up endeavor for peace. Beyond the failure of idealism, however, he finds a driving power in hope, a power which urge us to endeavor to accomplish peace. Hope is different from utopian expectations. Genuine hope is essentially based on our structure of being, especially of our consciousness of history. Human beings are essentially oriented toward the future. We anticipate the future, eschaton. The hope of the Kingdom of God is not the expectation of a perfect stage at the end of history. The anticipated fulfillment is a fragmentary fulfillment. Although the fulfillment is fragmentary, the anticipated fulfillment creates the hope which drives us to endeavor for peace.

## 1. 問題の所在

今日の世界状況において、平和の問題はまさに危急の問題であるといえよう。この地上に果たして恒久的な平和は実現可能なのか。キリスト教は平和の実現に向けていかなる寄与をなしているのか。本稿では、こうした問題に対して、希望に関するティリッヒの議論を手がかりに考察する。

本論に先立って、まず、平和の問題においてなぜ希望が問題となるのかを述べておこう。それはなにより、恒久的な平和がこの地上にまだ実現していないことにつきる。「神の国は近づいた(マルコ1:15)」というイエスの宣教からすでに2000年ほどが経過している現代において、この地上に神の国が実現していると、はたして言えるだろうか。少なくとも、誰の目にも明らかかな形で実現しているとは、とうてい言えない。その意味でわれわれは、いまだ神の国の実現を待ち望んでいる段階にある。だが、神の国がそもそもこの地上に実現するものであるのかどうか、また問題である。後に詳しく見ることになるが、ティリッヒにおいては、この地上における神の国の実現は期待されていない。ティリッヒによれば「神の国は平和と正義の王国というユートピア的期待(utopian expectation)を成就するものであるが、それは同時に「神の」という言葉を付け加えることで、その期待をユートピア的性格から分離する。なぜなら、この付加によって、地上における成就の不可能性が暗に承認されているからである」(Tillich[1963]:p.358)。ティリッヒは、神の国に対するユートピア的な期待は挫折せざるを得ないと考えている。しかしながら、われわれは挫折と失望の中であってこそ、かえって、希望を強く抱くものである。困難の内における希望の必要性について、ティリッヒは次のように言う。

「しかしたとえ、貧困、病気、社会的失敗というような最悪の状況の下でさえも、何らかの満足を与えるごく小さなことに対する希望であったとしても、希望なしで生きることのできるものはいない。希望がなければ、未来へ向かうわれわれの生の緊張は虚しく、それとともに生そのものも虚しいものとなるだろう。…それゆえ、私は本日、次のように問いかけたい。われわれは希望する権利を持っているのだろうか。…われわれは希望への権利、たとえ希望するすべもないときにさえ、存在するもののはかなさに抗して、死の現実にも抗してさえも、希望する権利を持っているのだろうか。」(Tillich[1965b]:p.276)

このように、ユートピア的な期待が挫折せざるを得ないとしても、だからこそなおのこと、ユートピアの幻滅を越えて、われわれが平和実現への希望をもち続けることができるのかということが問題になる。いったい、このような希望とはどのようなものであり、どのように基礎

づけられるものなのか。これが、本稿で論じようとする問題なのである。

## 2. 地上の平和は可能か

まずは、地上の平和の実現可能性について、ティリッヒがどのように考えていたのかを、1965年の「《地上の平和》について」(Tillich[1965a])から確認しておこう。

回勅《地上の平和》は、キューバ危機(1962年)の緊張もまだ記憶に新しい1963年4月に、教皇ヨハネ二十三世によって発布された。東西冷戦のさなかにおいて、キリスト教の指導者として、世界平和のために何をなすべきか。それはヨハネ二十三世にとって切実な問題であった。このヨハネ二十三世の回勅に対して、まずティリッヒは、教皇が平和の問題に対して声明を発表すること自体を「宗教的および政治的な思想史における重要な出来事」(Tillich[1965a],p.261)と位置づける。その上で、「私にとってもっとも価値があるように思われたのは、正義の究極的な原理、すなわち、他者との出会いにおける権利と義務の源泉であるような、万人の人格としての尊厳の承認が、全編にわたって強調されているその仕方である」(ibid.)と評価する。このように回勅の理念と意義を認めた上で、ティリッヒは、回勅への批判を展開する。

ティリッヒによれば、回勅は次のような問題を考慮していない。すなわち、回勅を規定している原理は西洋のキリスト教的ヒューマンイズムの文化圏に限定されており、本質的にはそれを越えていけない、不正義に対する戦いが不正義を生むことがある、力の行使はいかなるときに正義と結びつき、あるいは結びつかないのか(力の両義性の問題)、個人に妥当する道徳律を、どの程度まで集団の意志決定に適用できるのか、といった問題である(ibid.,pp.262-265)。回勅は、現実の多くの問題を考慮していないため、単なる基本的理念の表明にとどまってしまっている。そして、これらの問題が示していることは、「地上の平和に対するいかなる現実的な希望にも限界がある」(ibid.,p.265)ということにほかならない。

平和問題における立場の相違は「人間本性の解釈の相違に、したがって歴史の意味解釈の相違に、根本的に起因している」(ibid.,p.266)とティリッヒは述べる。回勅は「善なる意志を持ったすべての人間に」訴えかけているが、ティリッヒは「最善の意志のうちには悪の意志の要素があり、最悪の意志のうちには善の意志の要素があるということを分かっているすべての人間に訴えかけなければならない」(ibid.)という。すなわち、回勅は、人間の両義性を見落とし、「善なる意志を持った人間」を対象としている時点で、ユートピア的な理想主義を越え出るものではないのである。

こうした問題をふまえた上で、ティリッヒは次のように述べる。

「平和と正義が統治する歴史の最終段階を希望することはできない。歴史はその経験的な終局において成就されるのではない。そうではなく、何か新しいものが創造される偉大な瞬間において、あるいは宗教的に表現するならば、神の国が実存の破壊的構造を征服しつつ歴史の内に突入してくる偉大な瞬間において、歴史は成就されるのである。戦争は、そうした破壊的構造の最大のものの一つである。このことは、歴史内における正義と平和の最終段階がわれわれの希望できるものではないことを意味している。それでもわれわれは、時間の特定の瞬間における悪の力に対しての部分的な勝利を希望することができる」(ibid.,pp.270-271)。

ティリッヒは、「平和と正義の最終段階」といった完全な平和の実現は、人間の歴史内において望むべくもないものだと考えている。それゆえ、完全な平和の実現は幻想に過ぎず、挫折せざるを得ない。われわれにおいて経験される平和は究極的な平和ではなく、その断片的な実現にすぎないのである。

しかし、だからといって、こうした現実認識が平和の実現を断念して現状を追認する態度へと向かうわけではない。むしろ、平和がどれほど実現困難であっても、それでもなお、われわれは平和の実現を目指すべきではないか。そこでティリッヒは、平和の問題を、平和を求める原動力の問題として捉え直す。ティリッヒは言う、「われわれは問わなければならない。人間の本性と歴史の特性においてこの目標 [ 平和の実現 ] へ向かわせる動因は何であるのかを」(ibid.,p.266, [ 引用者補足 ])

ティリッヒにとって、平和の問題は、われわれの歴史内において完全な平和が実現するかどうかという問題ではなく(それは必ず挫折する) そのようなユートピア的な理想主義が挫折してもなお、われわれは希望を持ち続けることができるのか、という問題なのである。そしてティリッヒは、ユートピア主義の理想を越えてなお、われわれが抱くことのできる希望を、「ユートピア的な期待」とは区別される「真正の希望」と呼ぶ(ibid.)。ここに至って、われわれの考察は、ティリッヒの言う「真正の希望」がどのようなものであり、また、どのような人間理解および歴史解釈の上に成り立つものであるのか、ということの解明へと進まなければならないのである。

### 3.ユートピア主義とその克服

「真正な希望」がどのようなものであるのかを理解するためには、それとは区別される「ユートピア的な期待」について考察することが有効である。したがって、ここでは「ユートピア的な期待」がどのようなものであり、それがどのように克服されるのかという問題をティリッヒのユートピア論を手がかりにして考察する。<sup>(1)</sup>ティリッヒのユートピア論は、カイロス論と

共に、1920年代からの宗教社会主義論の展開の中で形成され、ティリッヒの歴史思想の中心的な位置を占めている。ティリッヒにおいて、第一次世界大戦後の時代の趨勢の中で、歴史の決定的な転換が現実化しつつあるというカイロスの意識は、やがてナチスの台頭という出来事によって幻滅に変わることになった。こうした現実を前にして、理想の挫折を越えてなお、人間は希望を抱き続けることができるのかという問題は、ティリッヒにとって切実な問題だったのである。こうした状況の中で展開された、ユートピアに対するティリッヒの批判的考察は、深化をへて、後に「諸民族の生におけるユートピアの政治的意義」(Tillich[1951b])において結実することになる。ここではこの論文を中心に、ティリッヒのユートピア論を分析することしよう。

### (1)人間存在におけるユートピアの位置づけ

ユートピアは、その「どこにもない場所」という原義が示すように、しばしば空虚な幻想として否定的に捉えられるが、決して単に無価値なものなのではない。むしろ、現実を越えたりアリティとしてわれわれに到来するという側面も持っている。ティリッヒは、ユートピアのこうした両義性ないし二重性を人間の存在構造に基礎づけて捉えようとする。ティリッヒは言う、「もし、ユートピアが無価値な幻想以外の何ものであるならば、それは人間の構造そのものの中に基礎を持つものでなければならない」(Tillich[1951b],p.532.傍点イタリック)のであり、「ユートピア的形式において思惟することが人間存在に属することならば、ユートピアは人間が排除しうるものではなく、人間が存在する限り存続するものなのである」(ibid.)。

では、ユートピアを生み出す人間存在の構造とはいかなるものなのだろうか。ユートピアはいかにして生み出されるのであろうか。こうした問題に対してティリッヒは、人間存在の存在論的分析によって答えようとする。そこでのポイントは、有限性を人間存在の根本的な様態として捉えるところにある。<sup>(2)</sup>人間は自己の有限性を自覚しており、非存在に脅かされてある自己を意識する。この非存在の意識はわれわれの内に不安を引き起こす。この不安は有限性という存在様態に起因する存在論的な不安であり、人間が有限な存在である以上、決して排除することのできない不安である。しかし、人間は単に非存在に脅かされるだけの存在ではない。有限性とは非存在を内に含みつつも存在している存在様態であり、それはティリッヒの言葉で言えば、「存在と非存在の混合」(ibid.,p.535)である。それゆえ、自覚された有限性は、ただ不安をもたらすだけでなく、不安のただ中で不安を受け、自らの存在を肯定する勇気へと結びつくものなのである。そして、この勇気もまた、ティリッヒにおいて、人間存在の構造に由来する存在論的な勇気として捉えられる。すなわち、存在と非存在の混合という人間存在の基本構造が、不安と勇気という二つの要素のバランス(ibid.)の問題として現れてくるのである。

ところで、こうした不安と勇気の二要素は、時間のカテゴリーと結びついてわれわれの現実

における態度を形成する。そのとき、不安と勇気の両義性は、われわれの現実認識のあり方にも現れてくる。たとえば、自らを過去に固定しようとする保守的態度は、未来における危険に対する不安の表れであると同時に、自らを保持しようとする勇気の一形式でもある( *ibid.*,p.537 )。これに対して、ユートピアは、この不安と勇気の二要素が未来の次元と結びついたときに現れてくる。「こうして、私は待望(Erwartung)というもう一つのカテゴリーに到達する。このカテゴリーは、いまやわれわれをユートピアの問題へと直接に導く。待望の中には不安と勇気の二要素があるのだが、それは過去との関わりにおいてではなく、未来との関わりにおいてである。待望は、人間の本質を構成する諸々の可能性の成就を未来に期待するのである。」( *ibid.* )。待望は二重の不安を内に含んでいるとティリッヒは言う。一つには、人間が未来へと向かうとき、これまで自分を保証してきた現在の状況を失うという不安であり、もう一つはある可能性を実現することによって他の可能性を失う不安である( *ibid.* )。こうした不安の中で、その不安を受け止め、自己の可能性の実現を求めることは勇気の行為である。そのとき人間は、可能性の実現のために「理想形態(Idealbildung)」を投影するのであるが、ティリッヒはそれが未来へ投影された場合を「前向きのユートピア」、過去を理想化して過去に投影したものを「後ろ向きのユートピア」と呼んでいる( *ibid.*,p.538 )。後ろ向きのユートピアは目標とする未来を理想化された過去の始原的状态と重ね合わせ、円環的な歴史観を形成するのに対して、前向きのユートピアは、こうした円環を突破して、歴史の中に新しいものを創造する。したがって、ユートピアは歴史認識とも深く結びつくことになるのだが、いずれにせよここで確認しておきたいことは、ユートピアが不安と勇気の二重性を基盤として、待望という未来への志向性を有する人間において形成されるものであるということである。ユートピアがこのように人間存在に深く根ざしたものである以上、ユートピアは人間にとって単なる幻想として排除しきれない重要性を持つのである。このことをふまえた上で、ユートピアが人間にとってどのような意味を有しているのをあらためて問わなければならない。

## (2)ユートピアの両義性

ティリッヒは人間にとってのユートピアの意味を、ユートピアの肯定、否定、超越という三段階に整理して論じている( *ibid.*,pp.567-578 )。ここではまず、ユートピアの肯定面と否定面を確認し、節をあらためてユートピアの超越について考察しよう。

まず、ユートピアの肯定的な意味について。ティリッヒは「ユートピアは人間の本質を、すなわち人間の実存の内的目的を表現している」のだから、「ユートピアは真理である」と述べる( *ibid.*,p.568 )。この真理はわれわれの目指すべき目標として、われわれの内に、あるいは前に先取り的に開示される。ユートピアはすべて一種の「先取り(Vorwegnahme)」であり、この先取りなくしては隠されたままにとどまっていたような諸々の可能性を開示する。つまり、ユ-

トピアはわれわれの可能性を切り開き、無数の可能性を実在化するものなのである。この意味で、ユートピアは「豊穡さ(Furchtbarkeit)」を有している。そして、こうしたユートピアの真理と豊穡さは、われわれを強く駆り立て、導くものである。すなわち、ユートピアは所与の現実を変革する力(Macht)を有しているのである。しかも、ユートピアは、まさに「どこにもない」ものであるからこそ、存在するものを超えて、存在するものに対してきわめて力を有するのである。

しかしながら、このユートピアの「どこにもない」ことが、同時にまた、ユートピアの否定的側面をうむ。真理、豊穡、力といったユートピアの肯定面は、現実を離れた夢想的な立場にあっては、そのまま非真理、不毛、無力といった否定面として現れる。ティリッヒによれば、ユートピアの非真理は、人間の有限性と疎外とを忘れてしまい、誤った人間像を前提としてしまうところにある。たとえば、ユートピアの立場から、疎外された人間をその疎外状況から救い出すべきだと主張されたとする。しかし、誰が救い出すのかと問い返せば、そのような立場が抱える矛盾があらわになる。疎外状況から救い出そうとするものも、やはり疎外状況にあるということを見過ごし、疎外状況の外から語ってしまっているのである。ほとんどすべてのユートピアが人間の疎外状況を語り、これを超えようとするが、それがいかにして可能かということは語らないのである(ibid.,p.570)。

また、ユートピアが願望の投影へと落ち込み、可能性と現実性を同一視し、不可能なものを可能であるかのように語るとき、ユートピアは幻想となり、「幻想的に誇張された願望」と一致する(ibid.,p.571)。このとき、ユートピアはまったく空虚で不毛なものになってしまう。こうして、ユートピアの非真理、不毛は人間を不可避的に幻滅へと陥れるだけの無力なものとなる。さらには、「ユートピアの無力は、幻滅を通じ、また幻滅に対する反動を通じて、一つのデモニーシユな力となる」(ibid.,p.572)のである。

このように、ユートピアは無意味な幻想に陥る危険性を常にはらんでおり、そのため、しばしば否定的に捉えられる。しかし、ユートピアは単に否定的であるわけではなく、人間の可能性を切り開き、現実を改変していく力をもたらすという点において肯定的に理解されるべきものでもある。ユートピアは肯定面、否定面をあわせもった両義的なものであり、しかも人間存在に深く根ざしたものである以上、簡単に排除してしまえるものでもない。問題は、ユートピアの否定面はどのように克服されるべきなのかということになる。そしてそれは、ティリッヒの言うところの「ユートピアの超越」の問題にほかならない。

### (3)ユートピアの超越

ユートピアの否定面をいかにして克服するのかという問題において注意すべきは、それが肯定面か否定面かというような単純な二者択一の問題ではないということである。ユートピアは、

それ自体が肯定性と否定性を併せ持った両義的なものだからである。ティリッヒは次のように言う。

「わたしが存在自体と呼んでいるものの普遍的法則、普遍的原理ないし存在論的構造、つまり、自己を保持しようとするにもかかわらず自己を超え行き、自己超出においては自己にとどまろうとし、自己を超え行きつつも自身を守ろうとするというこの構造は、ユートピアにも当てはまる。それゆえユートピアは常にそして必然的に、可能性と不可能性の間を漂っているのである」(ibid.)

ユートピアは、決して静的な理念や空想などではなく、自らを超え行こうとする動的なものなのである。ユートピアの一方の側面のみを批判したところで、その否定性を克服することはできないし、ましてやユートピアそのものを否定したり排除したりすることはできない。ユートピアの否定性の克服は、むしろ、ユートピア自身が、自らを超え行く動的な運動の中で、根源的に克服していくものでなければならない。では、そのような根源的な克服とはどのようなものであるのか。ティリッヒはこれを「垂直的」という表現で説明する。「根源的に超え行くとは、水平的なもの、常に進展するものの線上でなされるのではなく、垂直線上において超え行くことであり、超出の全領域を超え行くことを意味している」(ibid.,p.573)。ティリッヒは、この水平線上にあるユートピアを「ユートピア主義」と呼び、対して、垂直線上のユートピアを「ユートピアの精神」と呼んで区別する。<sup>(3)</sup>「ユートピア主義は、字義通りに解すれば偶像崇拜的である」(Tillich[1963],p.355)とティリッヒが言うように、誤った前提に立って必然的に幻滅へといたるユートピアとは、この水平線上にとどまるユートピア(ユートピア主義)のことであり、そして重要なのは「ユートピアを克服するユートピアの精神」(Tillich[1951b],p.578)なのである。

ティリッヒはまた、次のように言う。

「人間は、二つの秩序という概念を意識していなければならない。一つは水平面における秩序であり、有限性とその可能性・不可能性、成果と破滅の秩序である。もう一つの秩序は(ここでは言葉はただ象徴的に用いられるだけであるが)、世俗的および宗教的ユートピアによって神の国、天の国、正義の国などの象徴が適応されるような秩序である。」(ibid.,p.577)

このようにティリッヒは、垂直方向のユートピア(ユートピアの精神)を神の国の象徴を念頭に置いて考えている。そしてさらに



「二つの秩序という思想には次のような意味内容が含まれる。一つは、その中で成就だけが認められるのであるが、しかしまさにそれゆえ、われわれは成就を見ることができず、指示することができるだけだということ。もう一つは、その中で成就が空間と時間の中で実現するのであるが、しかし、まさにそれがゆえに、成就是実現されるのではなく、ただ先取りの、断片的にのみ、この時この形式で、ここに存在するだけだということである。」  
( ibid.,pp.577-578 )

歴史内におけるユートピアの克服は、先取りの、断片的なものである。これを完全な成就であると受け取ることはまさしく水平線上での歪曲であり、必然的に幻滅へといたる。むしろ、断片的な先取りであるからこそ、目指すべき理想としてわれわれを駆り立てるのである。

#### 4 . 真正な希望

ここまで、「ユートピア的な期待」がなぜ必然的に挫折するのか、どのように克服されるのか、という問題を考察してきた。それは、ユートピアの排除ではなく、ユートピアの捉え直しとしても言うべき事柄であった。では、このような「ユートピア的な期待」と区別される「真正な希望」とはどのようなものであるのか。

ティリッヒは「真正な希望」は、その根源に何らかの基礎を有しているという。

「ユートピア的な期待と真正な希望の違いはどこにあるのだろうか。種子には植物となるべき何かが存在するように、真正な希望の基礎には希望される何かが存在している。」  
( Tillich[1965a],p.268 )

「純粋な希望があるところでは、われわれが希望するものはすでに何かしら存在しているのである。」( Tillich[1965b],p.280 )

つまり、われわれは希望を持つとき、すでに希望の根拠を持っているのであり、希望を可能にする原動力を持っているからである。では、その原動力とは何であろうか。ティリッヒは「希望することはしばしば待つことを含む」( Tillich[1965b],p.282 )という。この「待つ」姿勢とは、決して受動的な姿勢ではなく、静かな緊張の中で、到来しようとするものに対して心を開きつつ、待つことを意味している (ibid.)。そして、「我々の待つことの内にある希望と絶望との間の闘いは、新しいものがすでに我々を捉えていることのしるしなのである」という (ibid.)。われわれは、歴史における「新しいもの」に捉えられることで、「待つ」ことの原動力を得るのである。この歴史における「新しいもの」とは、到来することで新しくなくなるようなものではな

い。経験領域に突入しつつも経験領域を超えた、つねに「新しい」ものでなければならない。それは伝統的に、神の国の象徴において表されてきたものにほかならない。この「神の国」とは、ティリッヒによれば、「動的な概念」であり、「それは完成されるのではなく、常に生成するのであり、内在的にも超越的にも、現在するのではなく、つねに「間近」にある」(ibid.,p.39)のである。

神の国はわれわれの歴史において内在的であると同時に超越的であり、われわれはそれを「間近」に感じつつも、決してわれわれのものとはならない。神の国はわれわれにおいて、断片的に先取りされるのみである。しかし、この断片的な先取りが、われわれが「待つ」ことを可能にする原動力であり、われわれの希望の源泉なのである。

## む す び

この地上に恒久的な平和を実現することはできるのか。このような問いに対して、積極的な答えを出すことは難しい。ティリッヒは「歴史がいわばその目的を成就する最終段階が存在するという考えは、人間の本性と矛盾する」(Tillich[1938],p.33)という。しかしながら、このことが平和への断念を意味するわけではない。われわれが望むのは、将来において恒久的な平和がこの地上に確立されるという確証ではない。希望は具体的な確証を求めるものでも、確証によって支えられるものでもない。「希望は感覚的経験や合理的証拠によって立証されることはない」(Tillich[1965a],p.279)。むしろわれわれは、希望を抱くことを求めるのである。希望するすべもないところで希望を抱くことが、いかなる困難な状況においてもわれわれを支え、励まし、努力させるのである。

「希望は希望する人々を未来へと導く力として、状況の中に、我々自身の内に、ここに存在している。今ここに、始まりがある。この始まりは一つの終わりへと導く。もし、希望がすでに与えられた何らかの現実性に根ざすならば、希望自体が導く力となり、成就を確実ではないとしても、可能なものとする。」(ibid.,p.280)

われわれは成就の断片的な先取りとして、つねに希望の種子を内に宿している。キリスト教的な立場からの平和の問題に対する寄与は、まさに、われわれ人間が、このような希望を根源的に有していることを弁証することで、平和の実現へ努力していく力、現実を改変する力に目覚めさせていくことではないだろうか。

## 註

(1)ティリッヒのユートピア論については、以下の文献も参照した。

芦名定道「ティリッヒのユートピア論」(『ティリッヒ研究』第3号) 現代キリスト教思想研究会、2001年

(2)ティリッヒの存在論的人間学は、この論文と同時期に書かれた『組織神学 第一巻』において、より綿密に展開されている。その中でティリッヒは「人間論が存在論にとっての主要な入り口である」(Tillich[1951a],p.167)として、人間存在の分析から存在論を展開する。それは、自己の有限性を自覚する人間だけが、存在の構造に直接気づいている (ibid.,p.168) からである。このように、人間の有限性がティリッヒの存在論の出発点であるのだが、ティリッヒが人間存在の構造分析を行う目的も忘れてはならない。すなわち、「われわれを神の問いへと駆り立てるのは、存在の有限性である」(ibid.,p.166)というように、人間存在において神の問いが本性的な問いであることを示すことが、主要な目的なのである。

(3)ユートピア主義とユートピアの精神の区別については以下の文献を参照。

Paul Tillich, Kairos und Utopie,1959.in:GW

「カイロスとユートピア」(ティリッヒ『キリストと歴史』新教出版社、1971年)

(たかはし・りょういち 関西学院大学 / 関西大学非常勤講師)

